

法界 13 化土往生

聖人が正信偈に「専雜執心判淺深 報化二土正弁立」と仰せられたように、雜行を修

する雜修の行者は自力の淺心だから化土の往生を得、正行を専修する行者は他力の深心だか

ら報土往生を得るので、原因が違えば結果は当然違うのである。同じ念仏に向いながら 第

十九願の行人は万行随一の念仏と見、第二十願の信者は万行超過の念仏と見、第十八願に

歸入した行者は自然法爾の念仏と見る。然るに真宗では 他力の念仏と聞けば既に他力

不思議を諦得したように自惚れ、他力の御廻向と聞けば既に自力の機執を離れたように自惚

れて、信後の真似をして、死後を楽しんでいる者が多いのだが、それでは他力を向こうに眺

めて各自各様に領解している、自心建立の心にすぎないのだから、報土往生は絶対に出来な

い。

同色に染めようと思っても、絹、木綿、羽二重、縮緬、モス、メリンス、毛物と品物が違っ

たらし色の上りはみな違ちがうように、同じ他力おなたりのきみ名号ようごうに向むかつていながらも、智ち、愚ぐ、賢けん、聖せい、貧ひん、富ふ、男女だんじょ、老幼ろうようの機毎きごとでは、その結果けっかは千差万別せんさばんべつである。雑行ぞうぎ雑修ざつしゆ自力じりきの心こころが千態万様せんたいまんようであるから、修しゆする人々ひとびとの善悪ぜんあくによつて果報かほうは悉く異なるのである。「良まことに仮けの仏土ぶつどの業因ごういん千差なれば、土ども復また応まさに千差せんさなるべし」人間にんげんという共業ぐうごうは平等びやうどうであつても、貧富ひんぷ、賢愚けんぐ、美醜びしゆう、強弱きやうじやく、寿命じゆみようの長短ちやうたん、一人ひとりとして平等びやうどうでないのは不共業ふぐうごうの然しからしめる処ところである。平等びやうどうの証果しょうかをうるには平等びやうどうの信念しんねんでなければならぬ。八万はうまうの法蔵ほうぞうを詮せんじつめた逆謗ぎやくほうの一機いつきが一体いったいになつた一念いちねんの関所せきしよを突破とつぱされ、開発かいほつされ、攝取せつしゆされた時ときでなければ一味平等いちみびやうどうの報土往生ほうどおうじやうとはならない。その境地きやうちに至いたる事ことは極難信ごくなんしんであり、人中にんちゆうの分陀利華ふんだりけである。

だから、聖人しやうにんは化土卷けどかんに「然しかるに濁世じよくせの群萌ぐんもう、穢惡えあくの含識がんしき、乃いまし九十五種しゆじやどうの邪道いを出いでて、半満はんまん権実こんじつの法門ほうもんに入いると雖いえども、真しんなる者ものは甚はなはだ以もつて難かたく、実じつなる者ものは甚はなはだ以もつて稀まれなり。疑ぎなる者ものは甚はなはだ以もつて多おほく、虚こなる者ものは甚はなはだ以もつて滋しげし」と仰おほせられたように、信仰しんこうの徹底てつていした者ものは

殆どいないのだ。二本差した武士は無数にいても、極意を究めた荒木又右エ門のようなものは滅多にいないのだ。頭を丸めた坊主は沢山いても親鸞や日蓮のような傑出した者は至極稀である。

伝教が叡山を開いて 修行を教えた聖道門の中で、根気の拙いものは念仏に入れと万行随一の念仏を教え、横川の源信和尚の往生要集によって 念仏の道が開かれ、吉水の法然上人の選択集によって大成されて 万行超過の念仏となり、親鸞の信心為本によって、名号は自然法爾の念仏となって輝いているのだが、真なる者は甚だ以て難く、実なる者は甚だ以て稀なりであるから、蟹が甲羅に応じた穴を掘るように、その人その人の進んだ結果が現れるのだから、各人各様の化土に往生するのだ。

真宗では化土往生を語る者は殆どいない。化土往生は自力の善人の往生する処で、我々のような疑心の悪人の行かれる処でないから、自分達は他力で報土往生させて頂くのだと簡単

に片付けてはいないだろうか。それは誤算も甚だしいぞ。

弥陀の真意も釈尊の教説も方便から真実に趣入さすのが目的ではないか。方便の者が少な
く、真実の者が数が多いと言えば顛倒の言葉である。小学校卒業は多く大学院卒業は少な
く、兵児担ぎは多く、横綱は少ない。俳優はざらにいるが、スターは稀である。農家は無数
に有るが、篤農家は殆どいない。信者は数多く妙好人は雨夜の星だ。十九・二十に停滞する
者が殆どで第十八願に趣入する者は殆どいない。三百八十余人の僧侶でさえも、信の座に就
く者は、御二人を除いてはわずかに三人だ。それに浄土真宗に流れを汲む者は、皆第十八願
の行者と見るは、早計も甚だしいを通り越して無茶だ。

和讃に

報の浄土の往生は

おほからずとぞあらわせる

化土けどにうまるる衆生しゅじょうは

すくなからずとおしえたり

報土ほうどの信者しんじゃはおおからず

化土けどの行者ぎやうじゃはかずおおし

自力じりきの菩提ぼだいかなわねば

久遠劫くおんごうより流転るてんせり

と、聖人しょうにんのお言葉ことばを何なんと見るみだろうか。繰くり返かえして読よむ。報ほうの浄土じやうどの往生おうじやうは、おほからずと

あらわせる。化土けどにうまるる衆生しゅじょうは、すくなからずとおしえたり。報土ほうどの信者しんじゃはおおから

ず、化土けどの行者ぎやうじゃはかずおおし。結果けっかから報土ほうどの往生おうじやうが少すくなくて、化土けどの往生おうじやうの数かずが多いおおと教おし

えられたのは、原因げんいんから言いえば専修せんじゆの者ものは少すくなくて、雑修ざつしゆの者ものが多いおお、即すなわち信樂しんぎやうかい開発ほつして

他力たうりき不思議ふしぎの金剛心こんごうしんを獲得ぎやくとくした者ものが少すくなく、合点がってんして他力たうりきの真似まねをしているじしんこんりゆうぎやうじゃ自心じしん建立こんりゆうぎやうじゃの行者ぎやうじゃ

が多いおおと言いう事ことではないか。

他力たうりきの真似まねをしているやすのは易やすいが、他力たうりき不思議ふしぎを体験たいけんする事は、甚難じんなんちゆう中の難事なんじである。

機執きしゆが浄尽じようじんされて仏凡ぶつほん一体いつたいの境地きやうちに立てば、これ程易ほどやすい他力たうりき不思議ふしぎの世界せかいはない。素人しろうとは数かずが多く玄人くわうとの数が少ないすくのは当然とうぜんではないか。色いろもなければ形かたちもない十方じゆうほう法界ほうかいに漲みなぎる如來にょらいの大慈悲だいじひを、色いろもなければ形かたちもない極惡ごくあく最下さいげの劣機れつきが諦得たいとくさして頂いたく事は、至難しなん中の至難しなんである。

そんなに難むずかしかったら凡夫ぼんぶに出来ないと言できわれるかもしれないが、凡夫ぼんぶに出来ない事ことは教おしえてない。弥陀みだは三願さんがんを以て指導しどうし、釈尊しゃくそんは三經さんきやうに開説かいせつして、邪見じゃけん憍慢きやうまんの自惚うぬぼれの自力じりきを漸次調整ぜんじちやうせいし趣入しゆにゆうせしむるが果遂かすいの誓ちかいの願功がんこうである。極致きよくちを究めきわめる者は至いたって少すくなく、一体たいになる者は至いたって稀まれであり、他力たうりきの真似まねをする者は至いたって多く、他力たうりきの贗物にせものは至いたって滋しげした。

信受本願しんじゆほん前念ぜんねん命終みやうじゆう、即得往生そくとくおうじやう後念ごねん即生そくしやうの心命終しんみやうじゆうの即得往生そくとくおうじやうの極意ごくいを諦得たいとくされた報土ほうど往生おうじやうの行人ぎやうにんは殆どほとんいなくて、その境地きやうちに到達とうたつし得ない人ひとは皆みな、雜行ぞうぎやう雜修ざしゆ、自力じりきの心こころの自分じぶん

の原因に^{げんいん}応じた^{おう}化土の^{けど}宿を^{やど}取りて^と千差万別の^{せんさばんべつ}果報を^{かほう}得る^えのだ。

典拠^{てんきよ}を出^だせば

一、大^{だい}經^{きやう} 爾^{その}時^{とき}、慈^じ氏^し菩^ぼ薩^{さつ}、仏^{ぶつ}に白^{もう}して言^{もう}さく、世^せ尊^{そん}、何^{なん}の因^{いん}、何^{なん}の縁^{えん}ぞ、彼^かの国^{くに}の人民^{にんみん}胎^{たい}

生^{しょう}なる。仏^{ぶつ}、慈^じ氏^しに告^つげたまわく、若^もし衆^{しゆ}生^{じやう}ありて、疑^ぎ惑^{わく}の心^{こころ}を以^{もつ}て諸^{もろ}の功^く徳^{どく}を修^{しゆ}し、彼^かの

国^{くに}に生^うれんと願^{がん}じ、仏^{ぶつ}智^ち、不^ふ思^し議^ぎ智^ち、不^ふ可^か称^{しょう}智^ち、大^{だい}乘^{じやう}広^{ひろ}智^{さとし}、無^む等^{とう}無^む倫^{りん}最^{さい}上^{じやう}勝^{しょう}智^ちを了^りせず。

此^この諸^{しよ}智^ちに於^おいて疑^ぎ惑^{わく}して信^{しん}ぜず。然^{しか}れども猶^なお罪^{ざい}福^{ふく}を信^{しん}じ、善^{ぜん}本^{ほん}を修^{しゆ}習^{じゆ}し、其^{その}国^{くに}に生^うれんと

願^{がん}ぜん。此^{この}の諸^{もろ}の衆^{しゆ}生^{じやう}、彼^かの宮^く殿^{でん}に生^よじ、寿^す五^ご百^{ひやく}歳^{さい}、常^{つね}に仏^{ぶつ}を見^みず、經^{きやう}法^{ぽう}を聞^きかず、菩^ぼ薩^{さつ}声^{しょう}

聞^{もん}聖^{しょう}聚^{じゆ}を見^みず、是^この故^{ゆえ}に彼^かの国^{こく}土^どに於^おいて之^{これ}を胎^{たい}生^{しやう}と言^いう。

二、觀^{かん}經^{きやう} 一^{ねん}念^{ねん}のあひだの如^{ごと}くに、即^{ぐく}ち極^{ごく}樂^{らく}世^せ界^{かい}に往^{おう}生^{じやう}するこ^をを^を得^え、蓮^{れん}華^げの中^{なか}に於^おいて

十^{だい}二^に大^{だい}劫^{こつ}に満^みち蓮^{れん}華^げま^まさに開^{ひら}く。

三、易行品 若し人、善根を種えて、疑えばすなはち華開けず。信心清浄なれば、華開きてすなはち仏を見たてまつる。

四、法事讃 極樂は無為涅槃の界なり。随縁の雑善おそらくは生じがたし。

五、礼讃 若し専を捨てて雑業を修せんとするものは、百に時に希に一二を得、千に時に希に三五を得。乃至 余、このごろみづから諸方の道俗を見聞するに、解行不同にして専雜異なることあり。ただ意をもつばらにしてなせば、十はすなはち十ながら生ず。雑を修して至心ならざれば、千がなかに一もなし。この二行の得失、前にすでに弁ぜるがごとし。

六、往生要集 雑修のものは執心不牢の人とす。ゆえに懈怠国に生ず。もし雑修せずして、もつばらこの業を行ぜば、これすなはち執心牢固にしてさだめて極樂国に生ぜん。乃至 また報の浄土に生ずるものはきはめて少なし。化の浄土のなかに生ずるものは少なから

ず。

七、正信偈しょうしんげ 專雜執心判淺深せんぞうしゅうしんはんせんじん 報化二土正弁立ほうけにどしようべんりゅう

八、真仏土卷しんぶつどかん それ報を案ずればほうあん、如来の願海によりて果成の土を酬報せりにょらいがんかい かじょうど しゅうほう。ゆえに報とい

うなり。しかるに願海について真あり仮ありがんかい しん け。ここをもつてまた仏土について真あり仮あ

り。選択本願の正因によりて真仏土を成就せありせんじやくほんがん しょういん しんぶつど じょうじゆ。乃至 すでにもつて真仮みなこれ大悲の

願海に酬報せりがんかい しゅうほう。ゆえに知んぬ、報仏土なりということほうぶつどを。まことに仮の仏土の業因千差な

れば、土もまた千差なるべしど せんじゃ。これを方便化身・化土と名づくほうべんけしん けど。真仮を知らざるによりて、

如来広大の恩徳を迷失すにょらいこうだい おんどく めいしつ。

九、化土卷けどかん 至心発願の願ししんほつがん がん、邪定聚の機じゃじようじゆ き、双樹林下往生そうじゆりんげ おうじよう、無量寿仏觀經の意なりむりようじゆぶつかんぎようこころ。

至心回向の願ししんえこう がん、不定聚の機ふじようじゆ き、難思往生なんじおうじよう、阿弥陀經の意なりあみだきようこころ。

つつしんで化身土を顕さば、仏は『無量寿仏觀經』の説の如し、真身觀の仏これなり。土は『觀經』の淨土これなり。また『菩薩處胎經』等の説のごとし、すなはち懈慢界これなり。また『大無量壽經』の説のごとし、すなはち疑城胎宮これなり。

十、化土卷 二十願なり。機について定あり散あり。往生とはこれ難思往生是なり。仏とは即ち化身なり。土とは即ち疑城胎宮是なり。

十一、愚禿鈔 ひそかに『觀經』の三心往生を案ずれば、これすなはち諸機自力各別の三心なり。『大經』の三信に歸せしめんがためなり、諸機を勧誘して三信に通入せしめんと欲ふなり。三信とは、これすなはち金剛の真心、不可思議の信心海なり。また「即往生」とは、これすなはち難思議往生、真の報土なり。「便往生」とは、すなはちこれ諸機各別の業因果成の土なり、胎宮・辺地・懈慢界・双樹林下往生なり、また難思往生なりと、知るべし。

十二、三経往生文類きようおうじようもんるい 観経往生かんきようおうじようというは、

十三、三経往生文類きようおうじようもんるい 弥陀経往生みだきようおうじようというは、

十四、和讃わさん 誓願不思議せいがんふしぎをうたがいて

御名みなを称しょうする往生おうじようは

宮殿くでんのうちに五百歳ひやくさい

むなしくすぐとぞときたまふ

報ほうの浄土じようどの往生おうじようは

おほからずとぞあらわせる

化土けどにうまるる衆生しゆじようをば

すかなからずとおしえたり

報土ほうどの信者しんじゃはおほからず

化土けどの行者ぎようじゃはかずおほし

自力じりきの菩提ぼだいかなはねば

久遠劫くおんごうより流転るてんせり

不了ふりようぶつち仏智ぶつちのしるしには

如来にょらいの諸智しよちを疑惑ぎわくして

罪福信じ善本を

たのめば辺地にとまるなり

罪福信ずる行者は

仏智の不思議をうたがいて

疑城胎宮にとどまれば

三宝にはなれたてまつる

罪福ふかく信じつつ

善本修習するひとは

疑心の善人なるゆえに

方便化土にとまるなり

仏智の不思議を疑惑して

罪福信じ善本を

修して浄土をねがうをば

胎生といふときたまふ

十五、末灯鈔

行者のおのおの自力の信にては、懈怠辺地の往生、胎生疑城の浄土まで

ぞ往生せらるることにてあるべき」とぞ、うけたまはりたし。乃至 仏恩のふかきことは、

懈慢^{けまん}辺地^{へんち}に往生^{おうじよう}し、疑城^{ぎじょう}胎宮^{たいぐ}に往生^{おうじよう}するだにも、弥陀^{みだ}の御^{おん}ちかひのなかに、第十九・第二
十の願^{がん}の御^{おん}あはれみにてこそ、不可思議^{ふかしぎ}のたのしみにあふことにて候^{そうら}へ。仏恩^{ぶつおん}のふかきこ
と、そのきはもなし。

十六、末灯^{まつとう}鈔^{しょう} 念仏^{ねんぶつ}往生^{おうじよう}と信^{しん}ずる人^{ひと}は、辺地^{へんち}の往生^{おうじよう}とてきらわれ候^{そうら}ふらんこと、おほかた
こころえがたく候^{そうら}ふ。乃至^{みようごう} 名号^{みごう}をとなふといふも、他力^{たうりき}本願^{ほんがん}を信^{しん}ぜらんは辺地^{へんち}に生^{うま}るべ
し。本願^{ほんがん}他力^{たうりき}をふかく信^{しん}ぜんともがらは、なにごとにかは辺地^{へんち}の往生^{おうじよう}にて候^{そうら}ふべき。

同行^{どうぎよう}よ!! 化土^{けど}の事^{こと}は聞^きかされていないから御承知^{ごしょうち}ないだけだ。雑行^{ぞうぎよう}雑修^{ざっしゆ}自力^{じりき}の心^{こころ}を振^ふ
り捨て^すた積^{つも}りで、素直^{すなお}に他力^{たうりき}の名号^{みようごう}に向^むいておれば、皆報土^{みなほうど}往生^{おうじよう}のように自惚^{うぬぼ}れているが、
危険^{きけん}極^{きくわ}まりない信仰^{しんこう}だ。

誰^{だれ}も雑行^{ぞうぎよう}を雑行^{ぞうぎよう}と知^しつて雑行^{ぞうぎよう}を行^{おこな}う者^{もの}はいない。雑修^{ざっしゆ}を雑修^{ざっしゆ}と知^しつて雑修^{ざっしゆ}を修^{しゆ}する者^{もの}はい

ない。自力じりきを自力じりきと知しつて自力じりきを働はたらく者ものはいない。疑うたがいを疑うたがいと知しつて疑うたがう者ものはいない。

知しらずに行おこなっているのだ。知しずに行おこなったからとて、その結果けっかは各自かくじが刈かり取とらなければならぬのだ。

信心しんじん頂いたいて報土ほうど往生おうじょうさせて頂いたこうと思おもつて参詣さんけいする者ものに、計はからいのない人ひとは一人もいない筈はずだ。計はからいつきて親おやに計はからわれていた事ことに驚おどろいて、捨しゃ自歸じきた他たした一念てつていの徹底までする迄みなは、皆みな信前しんぜんをうろついているのだ。その信前しんぜんの間あいだに死しねば洩もれなく化土けど往生おうじょうだ。

しかし化土けどに往生おうじょうする人ひとは疑心うたがしんの善人ぜんにんであつて、我々われわれは悪人あくにんだから化土けどには往生おうじょう出来できないと言いう人ひとがあるが、化土けどに行いかれない位くらいの者ものが、至極しごくの報土ほうど往生おうじょうの出来できる筈はずがない。いや他力たうりきで報土ほうどに参まいれるのだ。自力じりきがつきましたか他力たうりきに生いかされましたか、自分じぶんの機きを抜ぬきにして法ほうを死後しごに眺ながめているの

は、他力の真似をしている自力であつて、山羊の真似をしている狼だ。

我々は自力の機執が去り難く、一朝一夕で他力の願力に乗托し切らないから、方便の第十

九・第二十が建てられたのだが、その境地にいる間の人を疑心の善人と言うのだ。開発して

いないから疑心、素直に聞いていると自惚れているから善人だ。それが仏の慈悲によつて、

第二十願の果遂の願功により化土往生をさせて頂き、三宝を見聞しない罪を懺悔して報土に

趣入さして頂くのだ。

この機に用事がないと言えは無歸命安心だ。十劫の昔に助かっていると云えば十劫秘事

だ。開発の境地を語る者の悪口を言えは邪見だ。素直に聞いていると自惚れている者は傲慢

だ。邪見傲慢の悪衆生が、素直な人間と自惚れて、信後の真似をしているのだから、

化土巻に「悲しきかな、垢障の凡愚、無際よりこのかた助正間雑し、定散心雑するがゆえ

に、出離その期なし。みづから流転輪廻を度るに、微塵劫を超過すれども、仏願力に帰しが

たく、大信海に入りがたし。まことに傷嗟すべし、深く悲歎すべし。乃至 報土に入ることなきなり」

と聖人を慟哭せしむるものは素直に聞いていると自惚れている人達だ。何時になつたら悪夢から覚める時が来るだろうか。南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏。彼仏今現在成仏 法龍 称念必得往生。

同行よ!! 「真仮を知らざるによりて如来広大の恩徳を迷失する」と仰せられてあるが、仮を仮と知らない者は真に到達していないのだ。真を真と知らない者は体験がないからだ。真仮の分際を知らない者は摂取されてはいないのだ。三世の諸仏が呆れて逃げた本性の照らし出される事は容易ではないが、それが開発さるる事は希有の難事だ。二種深心が徹底して摂取された一刹那の広大難思の慶心を諦得さされた者なら、信前信後の水際が鮮やかにく。平生業成、現生不退、明信仏智の体験のない人は、如来広大の恩徳を迷失しているの

だ。
雑行、
雑修、
自力、
疑心の
朽を離れ
切らない
のだ。
離れ切ら
なければ
化土の結
果は免れ
ないのだ。